



第20回京都産業大学図書館書評大賞 入賞作品掲載号

図書館講演会	02
伊与原新氏 「小説×科学 創造の源」	
入賞者発表	06
図書館書評大賞総評	07
入賞作品および講評	
<大賞>	08
<優秀賞>	10
<佳作>	16
アンケート	26
統計	27
応募があった図書一覧	28
概要	31

小説 × 科学 創造の源

作家 伊与原 新氏



2025年6月30日(月)、作家の伊与原新氏をお迎えし、図書館講演会を開催しました。会場である本学図書館ナレッジコモンズに加え、Microsoft Teams でも生配信しました。

伊与原氏は科学を題材とした多くの著作を生み出され、2025年1月、『藍を継ぐ海』で第172回直木賞を受賞されたほか、様々な文学賞を受賞されています。

★ なぜ小説を書くようになったのか

伊与原氏は、大阪府吹田市で生まれ育ちました。色々な図書館をはしごして、本をよく読む子どもだったといえます。当時読んでいた本は、子ども向けのミステリーや SF 小説など。また、科学にも自然と親しみを持っていたようです。

「父親がエンジニアでしたけれども、科学が好きな人で。僕が小学生の頃に『ニュートン』(※注1)って雑誌が刊行されたんです。『ニュートン』が常に家にあるような状態で育ちましたので、自然と(科学に)親しみを持ったんですね。カール・セーガンのテレビ番組とかも、夢中になって父親と見ていました。そんなことで、科学、天体とか宇宙とか地球とか、そういうものがだんだん好きになっていったわけです」

中学生になると、なんとなく理系の道に進みたいと考えていた伊与原氏。当時学説として発展し始めていたプレートテクトニクスについて書かれた、上田誠也氏の『新しい地球観』(※注2)を読んで、理系の分野に進もうと決意します。大学は神戸大学理学部地球科学科に進み、その後東京大学大学院で、地球惑星科学を専攻。博士号取得後は、富山大学理学部で助教として、8年間勤務していました。

伊与原氏の専門は、地球物理学。その中でも、地磁気に関する分野を研究していました。地磁気とは、地球が持っている磁気、磁場(磁界)のことです。地球の真ん中付近にあるコアの対流によって、この地磁気は生じています。地磁気のことになると、地球内部の活動の様子が分かるのではないか、という考えで進められている研究分野です。

伊与原氏は特に、地球の古い時代の地磁気を復元しようと、世界各国の古い岩石が出る場所に赴き、岩石を採集し、実験を重ねていました。しかし上手くいかなかったといえます。

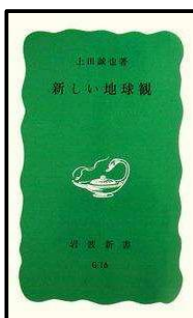


※注1 『ニュートン』

ニュートンプレスより刊行されている日本の科学月刊誌。数学、物理学、生物学、宇宙科学など、科学分野に関して幅広く扱っており、本学図書館でも継続して購入しています。

(最新号および直近のバックナンバー

→400NAA : S N8 2階雑誌コーナー)



※注2

『新しい地球観』上田誠也、岩波書店、1971
(450||UED 地下1階)

「地震とか火山がなぜ日本列島に多いのか(中略)などのいろんな謎が、プレートテクトニクスという考え方を導入することで明らかになる様子が描かれています」(伊与原氏談)

「いくら頑張っても、得られたデータが、本当に30億年前とか、20億年前のものなのか、っていうのを証明することができなかったんですね。岩石は古くなればなるほど、風化をしたり変質をしたり、いろんな情報が上書きされてしまっているんです。ですから本当にそれが、岩石ができた時の情報を持っているか、というのが分からない」

なかなか思うような成果が得られず、次第にやる気を失っていき、実験の待ち時間などの間に、ミステリー小説を読むことに逃避していたと、伊与原氏は振り返ります。そんなある日、大学からの帰り道に、ミステリーのトリックを一つ思いつきました。このトリックを使えば、自分にもミステリー小説が1本書けるのではないか、と思い、伊与原氏は小説を書き始めます。

完成した作品を新人賞に応募したところ、江戸川乱歩賞の最終候補に残りました。賞を主催する出版社の編集者から、「面白かったので、続けて書いてください」という言葉をもらい、2作目を書いたところ、横溝正史ミステリ大賞を受賞し、伊与原氏は小説家デビューを果たします。

伊与原氏はその後、2019年に『月まで三キロ』で新田次郎文学賞、静岡書店大賞、未来屋小説大賞を受賞。そして2025年1月、『藍を継ぐ海』(※注3)で第172回直木三十五賞を受賞しました。

今回の講演会では、この短編集『藍を継ぐ海』の中から「夢化けの島」「藍を継ぐ海」の2編について、伊与原氏がどのように小説の着想を得て取材をして、小説を書いているのか、という点を中心に、お話しいただきました。

★『藍を継ぐ海』(著作全体)について

『藍を継ぐ海』は5つの物語が収録された短編集です。それぞれ物語の舞台と、題材が異なります。『藍を継ぐ海』の作品全体を通して、伊与原氏は「やっぱり日本は広いな」と書いていて感じたそうです。

「日本ってとても均質性の高い国と人々だと思われていますけど、調べると全然そんなことはなくて、いろんな土地に全然知らない文化が、歴史がある。本当に多様な国だなと感じました。人々の営みっていうのは、その土地の自然とか、地質とか、動物の生態系に不可分だなと。その土地でその文化が成立してきた、というのにはちゃんと意味がある、理屈がある、ということが分かりましたね」

『藍を継ぐ海』のエピソードに続き、小説『宙わたる教室』(※注4)についてもテーマに挙げられました。

『宙わたる教室』は、第70回青少年読書感想文全国コンクール課題図書(高等学校の部)に選出され、NHKでドラマ化もされた作品です。

作品のモデルとなった定時制高校について、またドラマ化の際のエピソードなどを、お話しいただきました。(次ページに続く→)



※注3 『藍を継ぐ海』 伊与原新, 新潮社, 2024 (913.6||IYO 2階)

講演会で話のあった「夢化けの島」は山口県の萩市・見島が舞台で、萩焼や、土を題材とした作品です。「藍を継ぐ海」は徳島県の南東部、架空の漁村が舞台で、アカウミガメを題材としています。

伊与原氏は主に興味のある題材をテーマに、小説を執筆していることが多いそうですが、「夢化けの島」の題材である、萩焼や土については当初興味がなかったといいます。また「藍を継ぐ海」は、ウミガメが伊与原氏の研究分野である、地磁気を使って生きている動物であるということから、物語の題材となりました。

他に、舞台が奈良県・東吉野村、ニホンオオカミが題材の「狼犬ダイアリー」、舞台が長崎県・長与町、原爆の遺物が題材の「祈りの破片」、舞台が北海道・遠軽町、隕石が題材の「星隕つ駅通」が収録されています。



★『宙わたる教室』について

モデルとなったのは、大阪の春日丘高等学校を始めとする、定時制高校の科学部です。限られた予算で、アイデアと工夫を重ね、学会の高校生セッションや、科学コンクールで数多くの賞を受賞しています。また科学部のアイデアは、実際の惑星科学の基礎実験(小惑星探査機「はやぶさ2」の、小惑星リュウグウでの試料採取)にも活用されました。

この『宙わたる教室』は、2024年10月、NHK でドラマ化されました。講演会終盤の質疑応答での、「脚本について感心された点がありますか。またドラマ化の体験がその後の小説を執筆される時に、何か参考になった点がありますか」という質問に、伊与原氏は以下のように返答しました。

「脚本って基本的に地の文、セリフ以外の文がないので、セリフだけですべての状況を説明しなきゃならない。全く小説とは違うものが求められているな、というところが本当にすごいと思いました。セリフにすると、最初読んだ時はちょっと分かりやすすぎるんじゃないか、と思ったんです。(中略)でも実際に役者さんがそれを読むと、ものすごい説得力があるんですね。簡潔で分かりやすいセリフでないと、視聴者は多分背景とかが分からない状態で見ているので、セリフに集約させなければならぬ。そこを簡潔にまとめあげていく力というのは、すごいものがあるなと思いましたね。」

実際に自分の作品にも影響するか、というのは、もちろんそれはしてはしまして。セリフだけでいろんなことを、状況も含めて伝えていく、というのは学ばせてもらいました」



★そのほかの質疑応答を一部ご紹介します

Q.小説を書きたいと思っているのですが、途中で筆が止まってしまう。行き詰まった時はどうしていますか。

一番僕がやってみたらいいと思うのは、自分が書きたいラストシーン、というのはやっぱり思いついておくべきなんですね、最初に。僕はよく「このラストシーンを書くために俺は頑張る」という感じでやっています。結末でこういうシーンを書くんだ、というのがないと、途中で止まると、それ以上前に進めなくなることがありますね。

Q.論文もお書きになってきたと思うのですが、論文はどれだけ分かりやすく、理路整然と書いていくか、一方小説は文章表現というのが大事になってくると感じます。こういった感じで(文章を)書いているのか興味があります。

論文を書いていた時の考え方というのを、自分の中で大事にしているというか、染みついているところがあって、「再現性」というのを大事にしています。自分が思っている光景を、読者にも思い浮かべてほしい。そういうのも再現性ですけど、僕が作中で体験したことをそのまま追体験してもらえるように、誰が読んでも意味がひとつに定まるように文章を書く、っていうのが僕のポリシーで。(中略)僕の解釈と同じ解釈を、読者の人にしてほしいので、そこはすごく気を付けていて、誰が読んでも「この登場人物の感情はこうなんだろうな」、っていうのが分かる、誰でも「この光景はこんな光景なんだろうな」、というのが分かる、というのを大事にしています。

読みやすさということかというと、声に出して読んだりします。リズムっていうのがやっぱり必要なのかな、と思うので。一段落書いたらちゃんと文章を声に出して読んでみて、ひっかからないかとか、リズムがおかしくないかとか、というのはずっと繰り返してやっているところですね。



※注4 『宙わたる教室』 伊与原新, 文藝春秋社, 2023 (913.6||IYO 2階)

様々な年齢、ルーツ、バックグラウンドを持つ生徒のいる定時制高校に、藤竹という理科教師が赴任し、高校に科学部を作することを計画します。最初はあまり科学に興味を持っていなかった生徒たちが、藤竹とともに実験を行い、他の生徒と交流する中で、科学の世界に引き込まれていきます。

『オール讀物』(文藝春秋社刊)2024年11・12月号から、本作の6年後の定時制高校を描いた、シーズン2の連載が始まりました。

伊与原氏のその他の著作
すべて図書館に所蔵があります。



★『オオルリ流星群』伊与原新, KADOKAWA, 2024 (913.6||IYO 2階・文庫)

講演会の始めに、本学に天文台があることにちなみ、紹介いただきました。
神奈川県のアサギ市で高校時代を過ごした5人組が、45歳になり、それぞれ中年の悩みを抱えて生きている中で、協力して手作りで天文台を作ります。目的は、太陽系の果ての微惑星を観測すること。

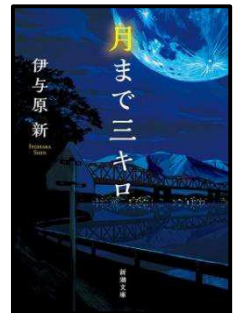
この小説を書くきっかけとなったのは、2019年に京都大学と国立天文台のチームが行った、市販の望遠鏡を用いた観測です。アイデアと工夫で大きな成果を生み出し、話題となりました。伊与原氏は彼らの挑戦と成果に感銘を受け、この作品を執筆されました。

★『月まで三キロ』伊与原新, 新潮社, 2021 (913.6||IYO 2階・文庫)

新田次郎文学賞、静岡書店大賞、未来屋小説大賞受賞作品です。

人生に行き詰まり、死に場所を探す男性とタクシの運転手との、一夜の会話を中心に綴られる表題作、中学受験と家庭の問題を抱え、母方の実家に静養に来た少年と、化石を探し川辺で日々石を叩く老人との出会いを描いた「アンモナイトの探し方」、男手一つで娘を育てる父親が営む食堂に、平日毎晩訪れる謎の女性と、親子との交流を描く「エイリアンの食堂」など6編が収録されています。人生につまずいた人、悩みを抱え、生きづらさを感じている人が、科学とその科学に関わる人と出会い、世界の見え方が少し変化していく様を描いた、短編集です。

文庫本には特別掌編「新参者の富士」も収録されています。



★『八月の銀の雪』伊与原新, 新潮社, 2020 (913.6||IYO 2階)

『月まで三キロ』と同様に科学と人、人と人の関わりを描いた短編集です。

就職活動に苦戦する理系学生が、コンビニでアルバイトをするベトナム人留学生に心を動かされる様を描いた表題作、不動産会社の社員が、古びたアパートのベランダに居ついた鳩について調べるうちに、意外な真実を知る「アルノーと檸檬」、会社員の女性が、京都・八瀬で珪藻を使ってアートを作る男性と、ひょんなことから関わることになる「玻璃を拾う」、元原発作業員の男性が、海岸沿いに上がる風を辿った先で、気象学の元研究者と出会ったことから科学の悲しい歴史を知る「十萬年の西風」など5編が収録されています。

★新聞データベースの紹介

今回の講演会では、着想のモデルとなった科学的なニュースや出来事について、当時の新聞記事も示しながら、紹介いただきました。

本学図書館では、新聞データベースを始め、様々なデータベースを契約しています。最新の科学ニュースや、過去に起こった歴史的な出来事など、データベースを利用することで、情報を集めることができます。小説の元となった科学の題材や事柄について、データベースを活用し調べることで、特に物語の科学的な内容について、より理解が深まるかもしれません。

データベースへのアクセス、使い方はこちら→



第20回京都産業大学図書館書評大賞

入賞者発表

第20回京都産業大学図書館書評大賞には110作品の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次のとおり入賞者を決定しましたので発表します。

(各賞ごとに氏名の50音順で掲載)

大賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名 等)
すぎた ふみ 杉田 文	文化学部 国際文化学科 4年次生	人間らしく生きるということ 『アルジャーノンに花束を』(ダニエル・キイス 著)

優秀賞

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名 等)
しおみ そら 塩見 颯良	経営学部 マネジメント学科 2年次生	正欲 『正欲』(朝井リョウ 著)
まえざわ きょうみ 前澤 杏実	文化学部 京都文化学科 3年次生	整形美女 『整形美女』(姫野カオルコ 著)
まきのや もも 牧野谷 桃	経営学部 マネジメント学科 1年次生	「無駄」の中に生きる 『モモ / 時間どろぼうとぬすまれた時間を人間にかえてくれた女の子のふしぎな物語』(ミヒヤエル・エンデ 著)

佳作

氏名	所属 年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名 等)
おかだ ようた 岡田 陽太	文化学部 国際文化学科 4年次生	もっと平等という不平等 『動物農場』(ジョージ・オーウェル 著)
おざき もか 尾崎 百華	文化学部 京都文化学科 4年次生	自分にとっての「生きる」とは、「普通」とは 『コンビニ人間』(村田沙耶香 著)
かめのその まこ 亀之園 菜子	文化学部 国際文化学科 3年次生	苦悩の原因は感情にあり 『アルジャーノンに花束を』(ダニエル・キイス 著)
たかはし あんな 高橋 杏花	文化学部 国際文化学科 4年次生	言葉にすることの難しさ 『あしながおじさん』(ジーン・ウェブスター 著)
たなか たつろう 田中 達郎	文化学部 国際文化学科 4年次生	戦争は何も生まない 『同志少女よ、敵を撃て』(逢坂冬馬 著)

図書館書評大賞総評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 大平 睦美

令和7年は京都産業大学創立60周年の記念の年にあたり、京都産業大学図書館書評大賞も20年目を迎えました。この区切りの年である今年の書評大賞には110作品の応募がありました。大学図書館で本学同様に書評大賞を実施している大学はありますが、毎年100作品もの応募がある大学は他に類をみません。今年度、大賞はじめ各賞を受賞されたみなさんにお祝いを申し上げますと同時に、応募された全てのみなさん、これまで20年間に応募くださった数多くの方々、それを支えてくださっている先生方、同窓会をはじめとする協賛団体のみなさまのおかげと心から感謝申し上げます。

今年の書評大賞受賞作品は例年にも増して、長年読み継がれてきた名作が選ばれたように思います。コロナ禍から5年を経て、世界は平穏を取り戻すかと思われましたが、未だ世界の多くの地域で戦闘や内戦が続いています。インターネットやスマートフォンの普及により、世界が近くなったはずなのに、私たちは大量の情報の中で暮らし、その情報によって分断された社会の中でデマや偽情報に心配りながら、日々の生活を営んでいます。

今年の書評大賞応募作品には科学の進歩によって生活が便利になった反面、「タイパ(タイムパフォーマンス)」や「コスパ(コストパフォーマンス)」という言葉で背中を押されることが果たして良い社会なのか、自分とは何か、幸せとは何を問う作品が多くありました。科学の進歩＝人間の進化ではありません。例えば電車やバスの発明は、移動時間が短く、楽に移動できるけれど人間の脚力は弱くなりました。科学の進歩によって人は退化することもあります。それと同様に、「タイパ」や「コスパ」を優先することで人は幸せになれるのだろうか、幸せとはなんだろうと書評を通じてみなさんから問いかけられている気がします。それらの問いには一人ひとり異なる答えがあるでしょう。もしかしたら答えはないのかもしれませんが。この問いに私なりの考えを述べるなら、私たちの幸せは私の中にあるもので、誰かと比較するものではないということです。大学生の60%が1年間に1冊の本も読まなくなったと言われて久しいですが、答えのない問いに自分なりの答えを見つけるために、また自分を深く見つめ直す時に読書がみなさんの支えとなることを期待しています。

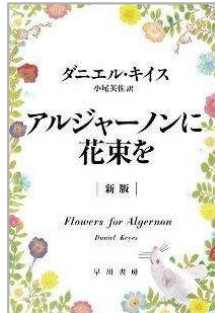
第20回 京都産業大学図書館書評大賞



大 賞

文化学部 4 年次生

す ぎ た ふ み
杉田 文



書 名：『アルジャーノンに花束を』

著 者：ダニエル・キイス

出版社，出版年：早川書房，2015

「人間らしく生きるということ」

頭がよくなれば、今以上に幸せになれる。そんな風に考えたことはないだろうか。周りの人に褒められたら、テストで良い成績を取れたら、仕事で成果を出せたら、きっと人生うまくいく。私たちは無意識のうちに賢くなることが人生の幸せへの近道だと信じているのかもしれない。だが、本当にそうなのだろうか。ダニエル・キイス『アルジャーノンに花束を』は、その問いに向き合わせてくれる作品である。

主人公のチャーリー・ゴードンは知的障害があり、ピークマン大学で知能に関する訓練を受けている。彼は脳手術によって知能が劇的に向上し、手術後、次第に知識を吸収し、そして周囲の人々との関係も変化していく。しかし、同じ手術を受けた実験用マウスのアルジャーノンが衰弱していく姿から、自分にも同じ運命が待っていることを知る。やがて知能は急速に退行していき元の状態に戻ってしまう。知能の向上と退行を経験し、周囲の人々や過去の記憶と向き合いながらチャーリーは人間らしさや愛されるということがどういうことか、その意味に気付いていく。

知能が高くなるにつれて、チャーリーはそれまで気づかなかった人間関係の本質を見抜くようになる。以前は友達だと思っていた同僚たちが、実は自分を笑いものにしていたことに気づいたときの彼の戸惑いや悲しみは、読者の胸にも深く刺さる。人は無知であるがゆえに傷つかないこともあるが、知識を得たことで傷つくこともある。これは、知能の向上が必ずしも幸福に直結しないという、作品を通して繰り返し示されるメッセージの一つだ。

さらに印象的なのは、チャーリーが知能の絶頂期にあっても、心の底から満たされているわけではないという描写だ。彼は周囲の人々と心を通わせることができず、むしろ孤独感を深めていく。彼の成長は一種の人間離れにも近く、人との距離が逆に広がっていく皮肉な構造がある。そしてその孤独のなかで、彼は過去のトラウマや家族との関

係にも向き合っていく。ここでは、知能だけでは解決できない感情の重さや人間の複雑さが浮き彫りになる。

やがて退行が始まり、かつての知識を失っていくなかで、チャーリーは再び周囲とのつながりを求めるようになる。特に、彼を支えてきたアリスとの関係には、人間的な温かさが取り戻されていく。知能を失いながらも、彼の中には人を思いやる心が確かに芽生えている。最後に彼が残した「アルジャーノンに花束を置いてください」という言葉には、知識や理性を超えた、優しさや祈りのようなものが込められている。

本作は、頭がいいことが幸せにつながるのかという問いを読者に投げかけながら、もっと本質的な「人間らしさとは何か」を静かに語りかけてくる。感情、記憶、つながり、孤独、喪失それらすべてを受け止めたときにこそ、私たちは本当の意味で人間になるのかもしれない。

選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 池田 昌広

ダニエル・キイスの長編小説『アルジャーノンに花束を』（以下、本書）は、1966年に出版されて以来、世界的なロングセラーを記録している。日本語訳も1978年に単行本が刊行されてから版を重ねている。本書が読まれ続けているのは、「人間らしさとは何か」という、人間存在の根源的な問いを読者に投げかけるからなのだろう。

本書評は、本書の概要を的確に紹介しつつ、単なる紹介ではなく、著者キイスが設定した核心的なテーマがどこにあるのか、未読者が理解できるよう提示している。知的障害を持つ主人公チャーリーが天才的な知能を得て、再びそれを失っていく過程で何を感じたか、知能と幸福の関係、人間的な愛情の価値など、本書のテーマを見事に捉えている。書評のあちこちに本書への共感が読み取れ、未読者に本書を読んでもみたいと思わせる喚起力があるのもすばらしい。本書のタイトルにもなった、チャーリーの最後の言葉が持つ意味について、読後に心に残る余韻や新たな気づきを提示できているのも優れた洞察と言える。文章もよく書けている。平易でリズムがあり語彙の選択も的確である。本書の核心的な問いを効果的に提示しており、非常に完成度の高い書評と評価できる。

入賞者から一言



この度は大賞をいただき、誠にありがとうございます。『アルジャーノンに花束を』には、良くも悪くも深く考えさせられる描写が多く、読み進める中で胸を揺さぶられる瞬間が何度もありました。今回の書評では、私が特に心を打たれた情緒的な部分を中心にまとめています。この作品の魅力を少しでも多くの方に届けるきっかけになれば嬉しく思います。

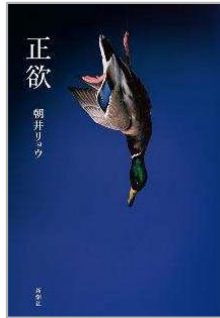
第20回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

経営学部 2年次生

し お み そ ら
塩見 颯良



書名：『正欲』

著者：朝井リョウ

出版社，出版年：新潮社，2021

「正欲」

私たちは、自分の「正しさ」がいつも正しいと思い込んではいないだろうか。「正しさ」に自信を持って生きているつもりでも、知らず知らずのうちにその「正しさ」で誰かを傷つけてしまっているのではないだろうか。朝井リョウ氏の「正欲」を読めば、きっと自分が信じていた「正しさ」という概念が大きく変化するだろう。

本書は、不登校の息子を抱える検事の啓喜、ショッピングモールの寝具用品店で働く夏月、大学の学園祭実行員の八重子の三人の視点で物語は動いていく。啓喜は不登校という社会一般では普通と思われるルールから外れた息子に対し、自らの「普通」への信念を揺るがされる。夏月は誰にも言えない、理解されない特殊な性的嗜好に苦しみ、八重子は容姿にコンプレックスを持ち、また男性に対し強い恐怖心を抱いている。このような家庭環境、性的嗜好、容姿など様々な異なる問題点を持つ彼らはある一つの事件をきっかけに彼らの人生は交差していく。

この物語の根底にあるのは、「人はどこまでいっても、他人を完全に理解することはできない」という現実だと考える。近年、多様性という言葉をよく耳にするようになった。「他人を理解しよう」、「共感しよう」という風潮がある。しかし、実際にはどうだろう。自分が共感できる人には手を差し伸べる一方で自分の価値観にないものを見たときは無意識に線引きしてしまっているのではないだろうか。自分が想像できる範囲で理解したつもりになってしまっているのではないだろうか。だからこそ、SNS時代である今、共感や理解が強く求められる一方で、そうでないものは非難されたり無視をされたりする傾向があるのではないか。本書が描いているのは、そんな共感の時代の裏に潜む、孤立と分断の現実だ。

物語の終盤、登場人物の一人が「なんでお前らは常に自分が誰かを受け入れる側っていう前提なんだよ。」と語る場面がある。私たちは無意識のうちに「受け入れる側」に

自分を置いてしまっていないだろうか。この言葉には、その傲慢さに対する怒りと、簡単に理解されてたまるかという叫びが詰まっているように感じられた。善意で誰かを理解しようとするのが、実は「お前は受け入れられる側だ」という押しつけになってはいないだろうか。ページをめくるたびに自分がどれだけ「正しい側」に立とうとしていたか思い知らされる。しかし、本書は「理解しあうこと」ではなく、「分かり合えないことを前提に、どう共に生きていくか」を問いかけているのではないかと考える。心地よさや感動を与える作品ではない。むしろ読後には、苦さと問いだけが残る。けれど、だからこそ価値がある。

他者を完全に理解できるという思い違いを超えて、私たちはどこまで共に生きられるのか。本書は、その問いを私たち一人ひとりに差し出してくる。ぜひこの小説を開き、自分自身の「正しさ」と向き合ってみてほしい

選考委員による講評

選考委員代表 現代社会学部教員 東 園子

この書評が対象とするのは現代社会の風潮を汲み取った話題作を次々発表する朝井リョウの小説です。この作品は第34回柴田錬三郎賞等を受賞し、映画化もされて各種邦画ベストテンに選ばれるなど評価が高いようです。その背景には多様性というテーマに対する社会的な関心の高さがあるでしょう。近年、ダイバーシティが称揚されつつ、それに対して押しつけがましさなどを感じて反発する人も少なくありません。だからこそ多様性をめぐる風潮に一石を投じるようなこの作品が注目を集めたのだと考えられます。そのような本作を、この書評は「人はどこまでいっても、他人を完全に理解することはできない」という現実を描いた作品だとの的確に捉え、「SNS 時代」という現代社会の特徴と結びつけています。完全に理解することができない「他人」は、何もマイノリティと言われる人たちに限りません。自分と完璧に同じであらゆる面で共感できる人がこの世に存在しない以上、多様性の問題は、特殊な少数派を多数派がどう「受け入れる」という話ではなく、すべての人が「受け入れる」側でも「受け入れられる」側でもあり、私たち一人一人に大きく関わる問題だということを、この書評は示しているといえるでしょう。

入賞者から一言



この度は優秀賞に選んでいただき、誠にありがとうございます。一冊の本とじっくりと向き合い、自分なりの言葉で伝える経験は私にとって大きな学びとなりました。本書評をきっかけに、『正欲』を手にとってくださる方がいれば嬉しいです。

第20回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

文化学部 3年次生

まえざわ

きょうみ

前澤 杏実



書名：『整形美女』

著者：姫野カオルコ

出版社，出版年：新潮文庫，2002

「整形美女」

近年、美容整形が身近なものとなってきているように感じる。インフルエンサーがおすすめの施術を紹介したり、中高生でも二重整形を行っていたりする。日本美容外科学会の調査によると、2021年時点で、メスを使うような外科的なものだけでも年間約27万件の美容施術が行われている。今回紹介するのは、美容整形で容姿を変えるとはどういうことなのかを考えさせられる1冊だ。

姫野カオルコの小説『整形美女』には2人の主人公がいる。飛び抜けて綺麗な容姿を持つ繭村甲斐子と平凡な容姿の望月阿部子だ。甲斐子は自分を美しいとは思っておらず、綿密な計画の元、阿部子のような容姿に全身を整形する。一方で阿部子は、二重整形をした友人をきっかけに整形を重ねるようになり、甲斐子のような容姿に整形をする。そんな容姿が入れ替わった2人が、整形後に出会う場面がある。甲斐子は「なぜわざわざブスにしたのよ」と、整形して美人になったはずの阿部子に言う。戸惑う阿部子に、甲斐子はそのうち意味が分かんと言ってその場を去る。その後2人はそれぞれの人生を歩み、甲斐子は理想通りの生活を送り満足するが、阿部子は徐々に整形したことを後悔するようになる。

この2人は、常に真逆の存在として描かれる。ひとつは「美人」の概念の違いだ。甲斐子は平凡で相手に警戒心を抱かせない容姿を「美人」と捉え、阿部子は飛び抜けて整った容姿を「美人」と捉えている。そして、整形をした動機も真逆だ。甲斐子は万人に好かれることを目的に、「美人」に整形するが、阿部子は「美人」になることが目的だ。甲斐子と阿部子の整形後の気持ちの差はここから生まれるのではないだろうか。綿密な計画の元で整形をした甲斐子は、周囲の反応の変化も想定内で、むしろそれが目的だった。しかし、阿部子の整形は勢いでしてしまったと阿部子自身も思っている。容姿を変えることがどのような影響を及ぼすのかを考えていない。阿部子は冗談のつもりで言ったこ

とも、整形後の顔では嫌味と取られてしまい、今まで平凡な容姿だからこそ許されていたことの多さを知る。周囲の反応の違いを目の当たりにし、甲斐子の言った「ブス」の意味を感じるようになる。「美人」になったことで内面は変わっていないのに、周囲の反応が違うことに違和感を覚えたことが後悔に繋がった。

本作は、対照的な2人の主人公が登場することで、容姿の与える影響の大きさを効果的に見せている。どちらが正しいとは言えず、どちらにも共感できる部分があり、引き込まれてしまう。自分の思う「美人」になるために整形をすることは、誰にも止められることではない。だが、相手に与える印象が変わり、それにより相手の反応も変わることも、誰にも止められることではない。整形が身近になった今だからこそ、容姿を変えることの影響力の大きさを忘れてはいけない。

選考委員による講評

選考委員代表 法学部教員 草鹿 晋一

そもそも、書評とはなにか。その本の持つ価値について客観的に分析し、言及することである。類書との違いを指摘し、新しい点について明らかにし、今後の波及効果を示し、もってその本の価値を（良し悪しは別にして）明らかにする作業、それが学問的な意義の書評である。一方、新聞等で目にする書評は、本の内容を紹介し、読者に「その本を読んで見たい！」と思わせることを目的として執筆されることが多い。

受賞作品はこの二つの要素を兼ね備えた書評であると評価できる。異なる容姿を持つ2人の女性が互いに相手に似せて整形手術をした、その結果起きるさまざまな事件とその結末を仄めかすことにより、書評の読者である私に小説に対する興味を持たせることに成功している。また、2人の心理を対比させることで、「美とは何か」という問題提起に成功している。書評に求められる二つの要素を兼ね備えたこと、これが本書評が優秀賞に選ばれた理由である。

入賞者から一言



自分が書いたものを人に読んでもらい、賞を頂けることが、こんなに嬉しいことだとは思いませんでした。これからも読書を続け、この魅力を伝えたいと思える1冊に出会いたいです。

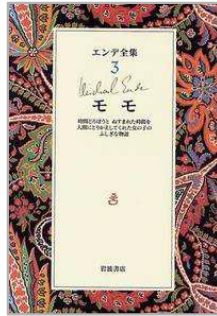
第20回 京都産業大学図書館書評大賞



優秀賞

経営学部 1 年次生

まきのや もも
牧野谷 桃



書名：『モモ：時間どろぼうとぬすまれた
時間を人間にかえしてくれた女の子
のふしぎな物語』

著者：ミヒヤエル・エンデ

出版社，出版年：岩波書店，1976

「「無駄」の中に生きる」

ミヒヤエル・エンデの『モモ』は、児童文学の枠組みを超え、現代社会を生きるすべての人に向けメッセージを投げかける作品である。物語の中心に登場するのは、時間貯蓄銀行から来たと名乗る不思議な存在、「灰色の男」だ。彼は、人々がこれまで何にどれだけの時間を使ってきたかを具体的な数字で示し、無駄な時間を削減することで将来豊かな暮らしが実現されると説いた。その言葉を信じた人々は、仕事や生活のあらゆる場面で効率化を追求し始める。子供たちと遊ぶ時間も、友人と語り合うひと時も、すべては「無駄」とみなし効率化のもとにそぎ落としていく。作中で明かされるのだが、灰色の男たちは人々が節約し生み出された時間を奪う時間泥棒であった。時間泥棒の策略によって精神的な余裕を失ってしまった人々は、効率化をさらに追及する。その結果残ったのは、生きがいを失った人々であふれる社会だった。

主人公のモモは話を聞くことに長けており、モモに話を聞いてもらった人々は自分自身の本当の想いを取り戻していく。『モモ』とは、人々の時間を盗む灰色の男たちがはびこる社会に、楽しみを取り返そうと奮闘する1人の少女の物語である。

興味深いのは、この物語は「タイパ(タイムパフォーマンス)」という言葉が語られ始めた現代よりも三十年以上前に書かれている点である。現在、私たちは動画を倍速で見たり、移動時間さえも学習や作業に費やしたりと、「いかに時間を無駄なく使うか」を日常的に追求している。しかしその結果、人生は本当に豊かになっているのだろうか。この現状に『モモ』は警鐘を鳴らしているといえる。

私が特に印象に残ったのは、子供たちが「遊び方を忘れてしまった」という描写である。物語の中では、子供たちが高価で完璧に作られたおもちゃを与えられるほど、遊び

への関心を失っていく姿が描かれる。エンデは本作中にて、「とりわけこまることは、高価なおもちゃは細かなところまで至れり尽くせりに完成されているため、子供が自分で空想を働かせる余地が全くないことです」と指摘する。便利で、効率的で、完成されたものが必ずしも幸せをもたらすとは限らない。寧ろ、「無駄」や「余白」の中にこそ、私たちは想像力と喜びを見出していたのかもしれない。

「時間がない」と私たちはよく口にする。だが、それは本当に「ない」のか。ただ時間を浪費している、あるいは「タイパを意識し有意義に使わねばならない」という強迫観念に支配されているだけではないのか。『モモ』は、時間を「いかに短縮するか」ではなく、「いかに味わいどう費やすか」と問いかけてくれる。この問いに真っ向から向き合うことが、『モモ』を読む最大の意義なのだと感じた。本作には、私たちが無意識に切り捨ててしまっている「無駄」を、改めて愛おしく思わせてくれる力が宿っている。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 大平 睦美

この書評を読んで、私が学生だった頃、私たち学生が「時間がない」と口にすると恩師が「時間は永遠にあります。時間がないのは人間だけです。時間は作るものです。」と私たちを諭されたことを思い出した。私たちは駅のアナウンスやタイムカードにせかされて、目的地に行くことを目的に慌ただしく過ごすことが日常になっている世界に生きている。この書評で人は目的地に行くことの意味を考える時や、目的を得る過程の中に真の学びがあることを改めて考える機会を与えてくれたように思う。この本にあるように、「遊び方を忘れてしまった」子供たちが大人になった世界とはどんな世界だろうか。『モモ』がミヒャエル・エンデによって著されたのは1973年である。私たちが時間に縛られ「タイパ」にこだわるのは私たちが暮らすこの世界はもしかしたら「遊び方を忘れてしまった」子供たちが作った世界だからではないか？今なら取り返せる私たち1人ひとりがモモになることが大切だと気づかせてくれる書評であった。

入賞者から一言



この度は優秀賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本作は中学生の頃に初めて読み、以来折に触れて読み返してきた思い出深い作品でもあり、その魅力を伝える一助となれば幸いです。添削や感想を寄せてくださった友人や先輩方にも心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

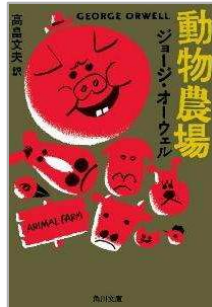
第20回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4 年次生

おかだ ようた
岡田 陽太



書名：『動物農場』

著者：ジョージ・オーウェル

出版社，出版年：早川書房，2017

「もっと平等という不平等」

「すべての動物は平等である。だが一部の動物は他よりもっと平等である」

この文章は本作で最も重要な一文である。一見、意味の通らないこの文章には、読者に強い違和感を覚えさせる矛盾が含まれている。「平等」という言葉になぜ“もっと”が付くのか。ジョージ・オーウェルの『動物農場』は権力の腐敗、プロパガンダの恐ろしさ、そして支配される側への批判までもを描いたディストピア小説である。

本作は人間が運営するメイナー農場で、動物たちが人間のために働いているにもかかわらず、だらけて餌もまともに与えてくれない主人を決起して追放するところから始まる。追放に成功した動物たちは高い知能を持ったブタのナポレオンとスノーボールを筆頭に、新たな秩序を築いていく。最初は「全ての動物が平等である」という規則を最重要事項として動物たちにとって働いた分だけ報われ、誰も支配されていない理想の農場を作り上げることに成功する。しかしその理想の世界も束の間、筆頭であるナポレオンと同じく筆頭のスノーボールとの意見の食い違いが起こり、ナポレオンは隠れて調教していた犬たちを使い多くの動物から慕われていたスノーボールを農場から追い出した。この追放以来ナポレオンは自らを絶対的な存在とし、ブタを優先させていく独裁が始まる。平等というものが損なわれていると疑う動物たちに対し、低い記憶力に付け込み言葉巧みに納得させるのがナポレオンの右腕のスクウィーラーである。スクウィーラーはだんだんと最初に決めた規則をブタにとって都合のいいように変更し、いつしかその権力は圧倒的なものになっていく。動物たちの置かれた環境は皮肉にも、人間を追放する前よりも明らかに悪化し、さらに情報操作によって多くの動物がその事実気付くことができない、または違和感を覚える動物たちも権力に屈するという、救いようのない残酷な世界になってしまったのである。

このような物語の流れにおいて、平等という概念に程度を表す言葉が付いたのは、

平等という言葉が理想の形としてだけ残りその意味を都合よく捻じ曲げる権力の腐敗、そしてその捻じ曲げられた事実気付かない、気付いても考えることをやめてしまうという支配する側、支配される側の双方の姿勢によって矛盾が正当化されてしまったからだと言える。これはただの文学作品ではない。権力によって理想が変わっていく腐敗の過程と、それに気づきながら思考を放棄してしまう弱さを描いた『動物農場』は、いつの時代よりも情報があふれかえる現代社会で、私たちがあらゆることに自らの意見を持って考えることをやめてしまっていないか。物事の一片を信じ込みすぎていないかを問いかける重要な警鐘にもなりうる作品なのである。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 中嶋 祐介

本書評は、作品中に登場する印象的な一文「すべての動物は平等である。だが一部の動物は他よりもっと平等である」を掲げるところから始まる。この一文だけからその意味を理解することは難しいが、書評では作品のあらすじを辿りながら、その意味を紐解いている。そして最後には、この一文の意味するところや、作品から読み取れる社会への警鐘がまとめられており、構成の巧みさを感じる。

本作では、平等であったはずの者達の間歪みが生じ、支配する側の情報操作と支配される側の盲信や無関心によって、その歪みが助長していく様子が、動物達を主人公とした寓話の形で描かれている。原著の出版は1945年であり、時代背景は現代と異なるが、評者が指摘するように、多くの情報に触れられるようになった現代だからこそ、「自らの意見を持って考えることをやめない」、「物事の一片だけを信じ込まない」ということを改めて認識する必要があると感じる。

入賞者から一言



今回は佳作に選出していただきありがとうございます。本作は独裁や、プロパガンダといった重い内容を動物に置き換えてキャッチーに描いている点が見所の作品です。限られた文字数の中で本作の魅力を少しでも多く表現したため入賞できて大変嬉しく思います。書評大賞への参加は今回で最後になりますが、中西先生のゼミに入って2回生から応募させていただいた経験は社会に出てからも活かせる貴重な経験になりました。ありがとうございました。

第20回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4 年次生

おざき もか
尾崎 百華



書名：『コンビニ人間』

著者：村田沙耶香

出版社，出版年：文藝春秋，2016

「自分にとっての「生きる」とは、「普通」とは」

現代社会において、コンビニエンスストアは誰にとっても身近な存在であり、利用したことのない人の方が珍しいだろう。本作『コンビニ人間』は、そんな「日常の場」であるコンビニを舞台に、36歳独身女性・古倉恵子の姿を描いた物語である。

古倉は18歳の頃から同じコンビニでアルバイトを続けており、就職した経験はない。この事実違和感を覚える読者もいるかもしれないが、彼女にとってコンビニは「普通」の在り方を明確に示してくれる場だった。マニュアルに従って動き、適切な言葉で接客することで、「社会的に正しい人間」を演じることができる——その安心感が、彼女をコンビニという空間にとどめていた。物語の中には、「コンビニ店員として生まれる」という印象的な表現が登場する。古倉にとってコンビニで働くことは労働というよりも「生きること」そのものであり、コンビニでの日常が、彼女のアイデンティティとなっていた。

子どもの頃から“おかしな子”と見なされてきた古倉は、「普通」とされる行動が周囲に喜ばれるのを見て、それを少しずつ学び取っていった。これは単なる迎合ではなく、自分なりの合理的な生存戦略だったといえる。周囲の人間の話し方や態度を真似し、妹に言われた通りに結婚しない理由を説明するなど、彼女の言動はすべて「普通」を演じている。社会の中に居場所を確保しようと、自分のかたちを変えている様子は、彼女が「そこにいるようで、いない」存在として生きていることに気づかされるだろう。

物語の転機は、同じく「普通」に苦しむ男性・白羽との出会いによって訪れる。一見、彼女と同じように生きづらさを抱えた存在に見える彼だが、その「普通」を求める動機は異なる。古倉は、周囲の喜ぶ「普通」を取り入れることで自分の在り方を築いてきたが、彼は「おかしいと思われたくない」という恐れから「普通」を装っていただけだった。古倉には芯があるが、彼には他人の目に揺れ動くばかりで、自分自身がない。

やがて古倉は、白羽とのやりとりをきっかけに、自身にとっての「生きる場所」であっ

たコンビニを辞める彼女にとっての生きる場所であったコンビニをやめることは彼女をどこへ向かわせるのか。そして物語の結末に彼女が得るものとは何か。

自分にとっての「生きる」とは何か。「普通」とは誰の基準なのか。本作は、生き方の多様性が叫ばれる一方で、依然として「普通」や「正しさ」といった固定的な価値観が強く残る現代社会において、それらとどう向き合うべきかを読者に問いかける。コンビニでの労働を通して社会との接点を確保していた主人公の姿は、現代に生きる私たち自身の不安や葛藤を映し出している。生きがいとは何か、自分にとって「生きる」とはどのようなことか——読む者に、自らの人生を見つめ直すきっかけを与えてくれる一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 中嶋 祐介

本書評に「生き方の多様性が叫ばれる一方で、依然として『普通』や『正しさ』といった固定的な価値観が強く残る現代社会」とある。他人の目を気にして自身の振る舞いを変える一方で、自身の価値観を無意識に他人に押し付けてしまうこともある。本書評でまとめられている、登場人物の「普通」との向き合い方やその違いを読んでいると、どこか自らの行動や思考を指摘されているような感覚に陥り、自分の「普通」との向き合い方が気になり始めた。そして「人生を見つめ直すきっかけを与えてくれる」という評者の言葉に後押しされ、本書を手にとった。この時点で、書評の目的のひとつは果たされていると言えよう。

周囲の思う「普通」を取り入れながら、居場所を確保していく主人公・古倉、自分たちの「普通」を押し付ける友人たち、「普通」による抑圧に苦しむ男性・白羽。ひとりひとりの言動を追いながら、自分自身はどうであろうか、と考えつつ読み進めた。自身を見つめ直すきっかけとして、この書評を読んだ多くの人にも本書を手にとってもらいたい。

入賞者から一言



入賞するとは思っていなかったため、大変嬉しく思います。本件をきっかけに読書の機会が増え、これまで以上に本を手にとるようになりました。今後はさらに読書の幅を広げ、さまざまな分野の本に触れていきたいと考えています。

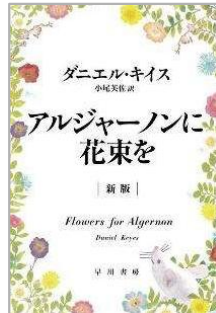
第20回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 3年次生

かめのその まこ
亀之園 茉莉子



書名：『アルジャーノンに花束を』

著者：ダニエル・キイス

出版社，出版年：早川書房，2015

「苦悩の原因は感情にあり」

ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』は、人間は知能の低い高いに拘らず、感情だけはどうしても人生から切り離して生きていけないことを、読者に教えてくれている。我々が生きる上で、必ず毎分毎秒自分の身にくっついてくるのが、感情である。不条理に遭えば苦しみが湧き、幸福な出来事には快い気持ちになる。今この瞬間にない過去の記憶や未来に対する不安にまで、感情は日々揺り動かされる。チャーリー・ゴードンの、知能が向上してもなおさいなまれる姿は、人間の底知れぬ感受性の深さを示唆しているだろう。

主人公のチャーリーは32歳で、IQ70の知的障害者である。6歳と同等の知能のためにできないことも多く、心無い言葉やまなざしを受け続ける日々だったが、彼は人々の嘲りを敵意と認識することはなかった。純粋な心で世界を見つめ、周囲の人間がみな優しいことを信じていたのだ。彼はある日、知能を上げることができるかもしれないという大学教授たちの提案に喜び、手術台に上った。手術の翌日から彼の知能は徐々に向上していき、数日後にはIQ180を超える知能を手に入れていた。だが、賢くなった彼がそのおかげで幸せになれたかという、むしろ上がったIQは彼を苦しめることになる。

知能が低かった頃のチャーリーにも、高かった頃のチャーリーにも、共通することが一つある。それは、負の感情に振り回されるということだ。手術前は、虐められると恐怖を覚えて泣いていた。知能が変化してからは、以前より冷静に知性を持って周囲を分析することができるようになったものの、その高い認識力が苛立ちや不快感の解像度を上げ、彼を苦しみに突き落としている。人間は感情によって大いに行動を左右される生き物だ。それゆえに人々は喜んで友達に抱きつくこともあれば、怒って友達の頬を叩くこともある。チャーリーもまた感情による自分の支配から抜け出せなかった一人なの

だ。そういう意味で、いくら知能が高くて、低くても、彼はずっと他の人間たちと変わらなかったといえよう。

知能さえあれば、賢ければ、きっと人生の全てが解決する……。そのように、技術や効率を求め、完璧しか認めようとしめない傾向は、思えば感情を置いてけぼりにはしていないだろうか。感情というものは目に見えない上、他者からは、微笑んだり顔をしかめるなど表面的な態度によってしか判別できない、そのため誤解も生じやすく人間関係の問題も起きやすい。感情に支配される苦悩から解き放たれるためには、まず自らを理解するために、その深い深い感情の泉に、腰掛けて対話することから始めるのが良いのかもしれない。チャーリー・ゴードンによりつづられる思索を追っていくことで、自己の内面をより意識するきっかけをつかむことができるだろう。

『アルジャーノンに花束を』は知能の問題をとりあげながら、人間の感情の源泉に視線を向けることの大切さを教えてくれる。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 大平 睦美

賢い(勉強ができる)人は人生を上手く生きることができるのか、人の幸せや不幸せは自己の知的レベルによって決まるのか。この書評では、人間の苦悩の原因は知的レベルの高さだけでは改善することが出来ない、苦悩には知的レベルだけではカバーし尽せない人の感情が存在することを私たちに訴えている。偏差値や学業成績、大学ランク、企業ランク、業務成績など私たちの周辺には数えきれないくらいの評価がある。しかし、そこで問われているのは真の人間の価値だろうか、ただその環境に適応できるかできないかを見られているに過ぎないと感じることはないだろうか。そのことから抱く苦悩についてこの書評では「感情に支配される苦悩から解き放たれるために」は「自らを理解するために、その深い深い感情の泉に腰掛けて対話することから始めるのが良いかもしれない」とあるが、それについてさらに具体的に示されていたならば、さらに良い書評となっただろう。

入賞者から一言



この度は佳作をいただき誠にありがとうございます。『アルジャーノンに花束を』は中学生の頃に出会ってから何度も読み返している大切な作品なので、とても嬉しいです。ぜひ皆様にも読んでほしいと思います。

第20回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4 年次生

た か は し あ ん な
高橋 杏花



書 名：『あしながおじさん』

著 者：ジーン・ウェブスター

出版社，出版年：光文社古典新訳文庫，2015

「言葉にすることの難しさ」

空気を読むことで自分の意見を言えなかったという経験はないだろうか。日本人ならそんな経験は誰にでもあると思う。しかし自分の意見を隠すということは思わぬ勘違いを引き起こし、結果的に大切なものを失ってしまうこともある。ジーン・ウェブスターの『あしながおじさん』は自分の意見を持ち、それを言葉にすることの大切さや難しさを描いた作品である。

文章を書くことが上手な主人公のジェルーシャ・アボットは孤児院の最年長である。彼女は毎月第一水曜日にある評議員の視察が嫌で、育ててもらっている孤児院を揶揄した作文、「ゆううつな水曜日」を高校生になって書いた。その作文は評議員が集まっている場で読まれ、それを聞いたある一人の評議員、あしながおじさんだが、彼女を作家にするために大学進学への援助を申し出た。その代わりに文書を作る練習もかねて、生きていたら両親に宛てて書くだらう手紙を自分に寄越すことを条件とした。本作は彼女が大学生活を送りながら、学生ならではの悩みや葛藤を経験し、成長していく話だ。

この物語で最も面白い点は主人公の性格である。物語の大部分が大学生になった彼女からあしながおじさんに宛てて書かれた手紙であり、それを読者が読むことで話が進む。その手紙では彼女のユーモアや素直な性格が溢れており、まるで実在する人物を見ているかのような臨場感がある。例えば初めての手紙であしながおじさんというニックネームを決める場面。初めは宛名を「拝啓、お金持ち様」などにしようとした彼女は侮辱になる、一生お金持ちではいられないかもしれないという理由から、変わることをしない身長で呼び方を決めた。また彼女は支援してもらう立場でありながら、自分の気持ち次第で手紙の文章が冷たくなる。このような不安定で儼然しない人間らしい感情の変化は共感できる部分が多く、読者を物語に引き込む。彼女はあしながおじさんがどのよう

な人物かわからないまま、約束の手紙を書き続ける。相手のことが全く分からないからこそ、彼女の感情や考えは言葉を丁寧に書かなければ伝わらない。そのもどかしさや彼女の手紙に対する真剣さや切実さも作品の面白さを引き立てる。

彼女は孤児であり、あしながおじさんに援助してもらっている立場である。しかしそのことに気後れして態度を変えることはほとんどない。うまくいかないことや叶わないこともあるが、自分の意志を持って言葉で伝えようとしている。物語の中でも実際に彼女とあしながおじさんの間にはすれ違いがあった。しかし自分の思いを手紙で伝えたことにより、すれ違いを乗り越えて幸せをつかんだ。思うだけでは相手に伝わらない。だからこそ言葉で伝えようとするものの大切さを彼女の姿から実感させられる。一見すると単純で当たり前なことかもしれない。しかし本作を読むと、本当にその単純なことができているのかを改めて考えさせられる。

選考委員による講評

選考委員代表 経営学部教員 近藤 隆史

本書評は、「空気を読む」日本社会の状況から書き出し、本作のテーマである「自分の意見を言葉にすることの難しさ・大切さ」(手紙・言葉を通じた自己表現)へと自然に橋渡ししており、導入から結論までの構成が明快です。本作のあらすじについても、孤児院での作文から大学生活、手紙という形式まで要点を絞って整理されており、未読者にも筋がうまく伝わると感じます。また、あしながおじさんの呼び名の場面や感情の揺れなど具体的なエピソードを引用しつつ、「人間らしさ」「言葉にすることの意義」という評価軸に結びつけているため、単なる感想にとどまらず、作品理解を深める批評にもなっていると考えられます。最後に「当たり前だが実はできていないこと」と読者自身への問いに引き寄せて終えており、説得力の高い書評だと評価できます。

入賞者から一言



この度は佳作に選出していただき、誠にありがとうございます。読書で感じたことをどう伝えたら読みたいと思ってもらえるのかと悩みながら書いたもので、このように評価して頂けて本当に嬉しいです。この書評を通してより多くの方が本作に興味を持ち、手に取って頂く機会になればと思います。

第20回 京都産業大学図書館書評大賞



佳作

文化学部 4年次生

た な か た つ ろ う
田中 達郎



書名：『同志少女よ、敵を撃て』

著者：逢坂冬馬

出版社，出版年：早川書房，2021

「戦争は何も生まない」

逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』は残酷な戦争の中で少女が生きる意味を見だし、人生をまっとうするさまを描いた物語だ。女性の視点から見た戦争という題材はジェンダーにまつわる議論が盛んな現代において関心を集めつつある。本作はそうした女性視点の戦争を少女の復讐劇という物語に上手く落とし込み、史実の持つ重厚な空気感とフィクションの物語的面白さを両立させており、非常に読みごたえのあるものになっている。

この物語の舞台は1942年のソ連、つまり独ソ戦の最中である。主人公の少女セラフィマは、18歳の時故郷の村がドイツ軍の標的となり大切な家族と平穏な暮らしを失った。セラフィマは赤軍と呼ばれる当時のソビエト連邦の軍隊に救出されるが、その際出会ったのが女狙撃兵イリーナである。イリーナはセラフィマを助ける際「戦いたいのか、死にたいのか」と問いかける。家族を失ったセラフィマは生きることを諦めようとしていたが、イリーナはそれを見て思い出の品を破壊し、家を燃やすなどして彼女の憎しみを煽りはじめた。ドイツ軍とイリーナへの憎しみを募らせるセラフィマは生きて戦うことを選択し、イリーナのもとで狙撃兵としての厳しい訓練を受けることになる。そして得た狙撃の技術と憎しみを燃料に、戦場で生きる意味を見だし戦っていくことになる。イリーナはそんなセラフィマにその先へ目を向けさせるべく彼女を指導していく。

「戦争は何も生まない」という言葉を誰もが一度は耳にしたことがあるだろう。しかし、その意味を真剣に考えたことはあるだろうか。この作品は戦争に意味を見だし戦った者たちが得てしまう埋め難い喪失を克明に描くことで、何故戦争は何も生まないのかという問いにはっきりと答えを出している。そしてこの言葉通り戦争が何も生まないならば、戦争に生きる意味を見いだした少女はどうすればいいのか。いったい何を生きる意味に据えるべきなのかという問いへとテーマが変遷していく。戦争に生きる意味を

持つ者はいずれ何もかも失うことになる。イリーナは自身の経験からそのことを知っていた。セラフィマは憎しみが支配する戦場で少しずつそのことに気づき、成長していく。

この物語は戦争を経験していないわたしたちに向けて、一人の人間の主観から戦争に生きる意味を問い、そこから得るものが無いと断言することで痛烈に戦争を否定している。読後は戦争がどれだけ不利益しかもたらさないか理解でき、現代日本という平和な環境の有り難みをより感じるができるだろう。

選考委員による講評

選考委員代表 現代社会学部教員 東 園子

書評大賞の狙いの一つに、学生の皆さんの読書欲を喚起して、図書館を訪れ慣れ親しんでもらう機会を作ることがあります。この書評は、個人的に最も「この本を読みたい」と思わされたものでした。作品の舞台であるロシアが今も戦争をしているように、残念ながら戦争は決して過去のものではありません。今の日本でも将来日本が戦争することを肯定する人も少なからずいるようです。それは実際に戦争を体験した人や、そのような人たちから体験談を聞いたことがある人が減ってきたことも一因でしょう。社会の中に戦争経験者が少ないこと自体は喜ばしいことですが、それが新しい戦争の誘因になることは望ましくありません。そのようなときこそ戦争を書いた本の出番です。この書評をきっかけにこの小説を読み、そこからさらに参考文献の『戦争は女の顔をしていない』などにも読書を広げて、戦争について考える若い人が増えることを願っています。

入賞者から一言



この度は佳作に選出していただき、誠にありがとうございます。戦争という難しい題材を扱うこともあり、魅力を伝えるための表現方法について試行錯誤した甲斐がありました。この書評を通して人に伝える文章力を大きく伸ばせたと感じています。頂いた評価に恥じぬよう、今後も研鑽を積んでいきたいと思ひます。

第20回京都産業大学図書館書評大賞 アンケート結果



アンケートの回答を一部紹介します。ご協力ありがとうございました！

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

- インプットだけでなく「書く」「発信する」といったアウトプットも大切だと感じたから。
- AIに頼ることが多くなってきているので、伝えたいことを文章で表現できるか確認したかったから。
- 読書習慣を取り返したいと思ったから。
- 本を選ぶとき書評を参考にすることが多いので、自分がそのような文章を書く側に立ち、本の魅力を伝えたいと思ったから。
- 図書館内での案内(ポスター・チラシ)を見て興味が出たから。
- 教員から応募するよう推薦があったから。
- 授業・ゼミ活動の一環として。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

- 興味のある分野だから …37人
- 好きな作家だから …33人
- 話題の本だから …11人
- 図書館で見つけたから …10人
- 先生からの推薦・指示 …1人
- その他 …9人
 - 高校時代に読んだことがあり、印象に残っている本だったから。
 - 直近で読んで印象に残っていたから。
 - 今まで読んだ中で一番重い話で、まじめな書評を書くのに一番適していると思ったから。

Q3) 次回も応募してみたいですか。

- はい …77人
 - 書評を書くことが楽しかったから。
 - 書評を書くことで、その本に対してより深い理解を得ることが出来たから。
 - 書評大賞に応募したことで、読書体験を深く振り返り、作品と真剣に向き合うことができたから。
- いいえ …26人
 - 文章を書くのは苦手だから。
 - 今年度で卒業するから。
 - 大学生活が思っていたより忙しく、余裕がなくなると感じたから。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

- 難しかったけど書いて楽しかった。
- ただ感想や思ったことを書くだけではいけないのが書評ならではの難しい点だと思った。
- 書くために考察する過程でこれまで読んで理解していたことより深く作品を理解できた。
- 自身の伝えたいこの著作の魅力をいかに伝えやすい文章にするかに苦戦した。
- 1200字以内の短い文章の中に文を抑えることが難しいと感じた。字数制限を見直して欲しい。
- 二作品以上提出する場合の提出方法がわからなかった。

Q5) 「図書館講演会」について、今後、期待する内容・講師などのご希望がありましたらお聞かせください。

- 本に興味がある人よりも、ない人に向けた講演会を行い、読書好きな仲間をもっと増やしてほしい。
- 作家の人を呼んでの講演だけでなく編集者や校閲者などの本に関わる様々な人の話を聞きたい。
- 若者の本離れを防ぐには、などの今後の図書館について学びたい。
- ジェンダーに関する本を書いている方のお話を聞きたい。
- 図書館の仕事を体験するとかも面白いのではないかなと思う。

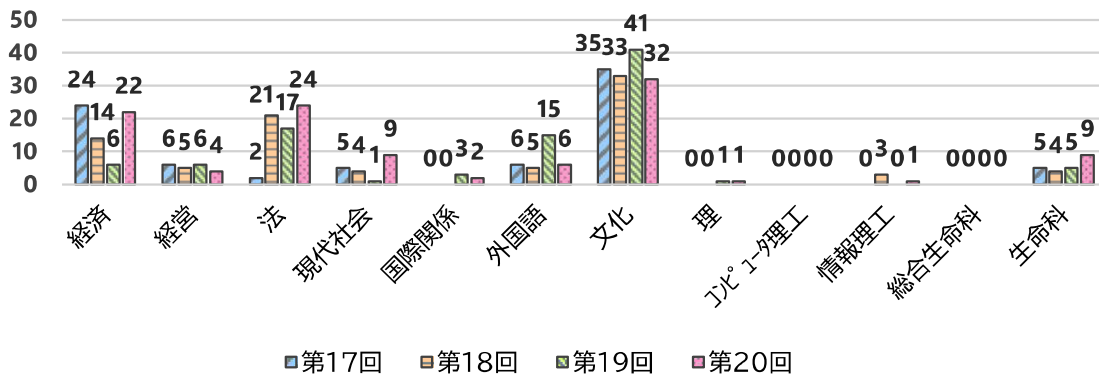
【講演会講師希望】(敬称略・50音順)

朝井リョウ・新胡桃・伊坂幸太郎・上橋菜穂子・小川哲・辻村深月・東野圭吾・三秋縋・湊かなえ・村上春樹

など

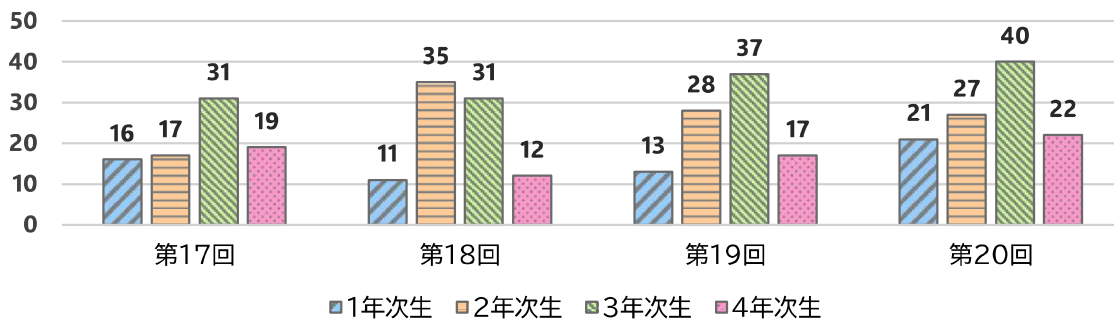
図書館書評大賞 応募統計

◎ 学部別応募者数



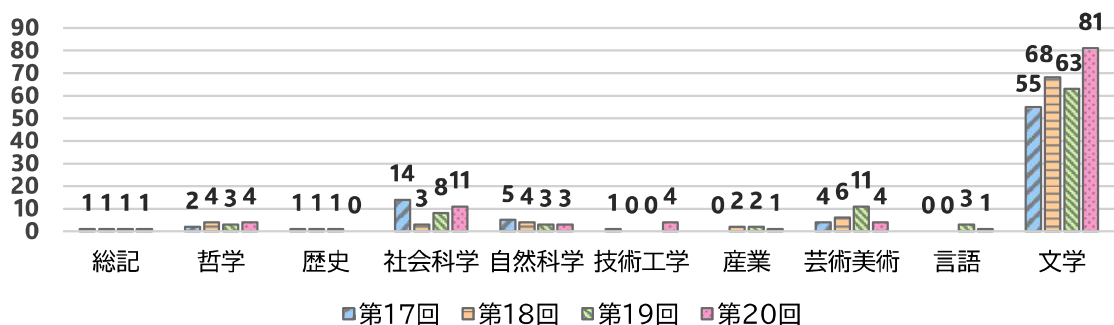
学部別では文化学部、法学部、経済学部の順に応募がありました。経済学部は前回(第19回)から3倍以上の大幅な伸びとなっています。

◎ 学年別応募者数



学年別では2年次生と3年次生から多数の応募がありました。この傾向は第17回以降継続しています。

◎ 対象図書の分野別応募数



書評執筆対象の図書は、文学が過半数を占めており、他の分野の書評は多くありません。この傾向は第17回以降継続しています。

第20回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵場所・請求記号順
2025年5月時点

書名	著者	出版社	出版年	配置場所	請求記号	資料ID
世界を一枚の紙の上に：歴史を変えたダイアグラムと主題地図の誕生	大田暁雄	オーム社	2021	2階	002.7 OOT	01379673
嫌われる勇氣	岸見一郎、古賀史健	ダイヤモンド社	2013	2階	146.1 KIS [1]	01402008
質問は人生を変える：「本音」と「本気」を引き出す力	マツダミヒロ	きずな出版	2018	2階	159 MAT	01337668
1%の努力	ひろゆき	ダイヤモンド社	2020	2階	159 NIS	01373316
同志少女よ、敵を撃て	逢坂冬馬	早川書房	2021	2階	913.6 AIS	01377990
正欲	朝井リョウ	新潮社	2021	2階	913.6 ASA	01381689
ベッパーズ・ゴースト	伊坂幸太郎	朝日新聞出版	2021	2階	913.6 ISA	01378201
ハンチバック	市川沙央	文藝春秋	2023	2階	913.6 ITI	01391763
宙わたる教室	伊与原新	文藝春秋	2023	2階	913.6 IYO	01403006
オルタネート	加藤シゲアキ	新潮社	2020	2階	913.6 KAT	01371527
52ヘルツのクジラたち	町田そのこ	中央公論新社	2020	2階	913.6 MAT	01377785
成瀬は天下を取りにいく	宮島未奈	新潮社	2023	2階	913.6 MIY	01396848
ノルウェイの森	村上春樹	講談社	1987	2階	913.6 MUR 1 913.6 MUR 2	01391618 01391810
コンビニ人間	村田沙耶香	文藝春秋	2016	2階	913.6 MUR	01306858
流浪の月	凧良ゆう	東京創元社	2019	2階	913.6 NAG	01379494
君のクイズ	小川哲	朝日新聞出版	2022	2階	913.6 OGA	01390067
ヨモツイクサ	知念実希人	双葉社	2023	2階	913.6 TIN	01396660
推し、燃ゆ	宇佐見りん	河出書房新社	2020	2階	913.6 USA	01372033
不思議の国のアリス	ルイス・キャロル	亜紀書房	2015	2階	933.6 CAR	01287236
神は死んだ	ロン・カリー・ジュニア	白水社	2013	2階	933.7 CUR	01250255
暇と退屈の倫理学	國分功一郎	新潮社	2022	2階 文庫	104 KOK	20220352
死刑でいいです：孤立が生んだ二つの殺人	池谷孝司	新潮社	2013	2階 文庫	368.61 IKE	20133578
ホームレス中学生	田村裕	幻冬舎	2010	2階 文庫	779.14 TAM	20231179
マネー・ボール	マイケル・ルイス	早川書房	2013	2階 文庫	783.7 LEW	20133560
小さき者へ	有島武郎	岩波書店	2004	2階 文庫	913.6 ARI	01047888
十角館の殺人	綾辻行人	講談社	2007	2階 文庫	913.6 AYA	20224592
走れメロス	太宰治	新潮社	2005	2階 文庫	913.6 DAZ	20220577
沈黙	遠藤周作	新潮社	2003	2階 文庫	913.6 END	20211264
ブルータスの心臓：完全犯罪殺人リレー：長編推理小説	東野圭吾	光文社	1993	2階 文庫	913.6 HIG	20114013
人魚の眠る家	東野圭吾	幻冬舎	2018	2階 文庫	913.6 HIG	20190514
整形美女	姫野カオルコ	新潮社	2002	2階 文庫	913.6 HIM	01002387
宇宙のあいさつ	星新一	新潮社	2003	2階 文庫	913.6 HOS	20220458

第20回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵場所・請求記号順
2025年5月時点

書名	著者	出版社	出版年	配置場所	請求記号	資料ID
むらさきのスカートの女	今村夏子	朝日新聞出版	2022	2階 文庫	913.6 IMA	20224080
ハーモニー	伊藤計劃	早川書房	2010	2階 文庫	913.6 ITO	20125114
オオルリ流星群	伊与原新	KADOKAWA	2024	2階 文庫	913.6 IYO	20250963
余命10年	小坂流加	文芸社	2017	2階 文庫	913.6 KOS	20224156
三日間の幸福	三秋縋	KADOKAWA	2013	2階 文庫	913.6 MIA	20190712
高校入試	湊かなえ	KADOKAWA	2016	2階 文庫	913.6 MIN	20240798
仮面の告白	三島由紀夫	新潮社	2003	2階 文庫	913.6 MIS	01116799
四畳半神話大系	森見登美彦	角川書店	2008	2階 文庫	913.6 MOR	20212220
月の影の海	小野不由美	新潮社	2000	2階 文庫	913.6 ONO 1 913.6 ONO 2	01044944 01044945
か「く」「し」「ご」と「	住野よる	新潮社	2020	2階 文庫	913.6 SUM	20200784
かがみの孤城	辻村深月	ポプラ社	2021	2階 文庫	913.6 TUZ 1 913.6 TUZ 2	20231180 20231181
横道世之介	吉田修一	文藝春秋	2012	2階 文庫	913.6 YOS	20126110
1ドルの価値	O.ヘンリー	光文社	2007	2階 文庫	933.7 HEN	20212412
アルジャーノンに花束を	ダニエル・キイス	早川書房	2015	2階 文庫	933.7 KEY	20251034
サキ短編集	サキ	新潮社	2007	2階 文庫	933.7 SAK	20211194
あしながおじさん	ウェブスター	光文社	2015	2階 文庫	933.7 WEB	20151898
サロメ	ワイルド	光文社	2012	2階 文庫	952.6 WIL	20125077
レ・ミゼラブル	ユゴー	新潮社	2012	2階 文庫	953.6 HUG 1 953.6 HUG 2 953.6 HUG 3 953.6 HUG 4 953.6 HUG 5	20220416 20132278 20220417 20220418 20220419
青い麦	コレット	光文社	2010	2階 文庫	953.7 COL	20212484
存在の耐えられない軽さ	ミラン・クンデラ	集英社	1998	2階 文庫	989.53 KUN	20220214
行動経済学が最強の学問である	相良奈美香	SBクリエイティブ	2023	3階	331 SAG	01391264
宇宙兄弟「完璧なリーダー」は、もういない。	長尾彰	学研プラス	2018	3階	336.3 NAG	01334300
人は話し方が9割：1分で人を動かし、100%好かれる話し方のコツ	永松茂久	ずばる舎	2019	3階	361.45 NAG	01378533
ヤングケアラー：介護を担う子ども・若者の現実	澁谷智子	中央公論新社	2018	3階	367.3 SIB	01338353
家族という呪い：加害者と暮らし続けるということ	阿部恭子	幻冬舎	2019	3階	368.64 ABE	01348020
残らなかったものを想起する：「あの日」の災害アーカイブ論	高森順子	堀之内出版	2024	3階	369.3 TAK	01398010
免疫力を強くする：最新科学が語るワクチンと免疫のしくみ	宮坂昌之	講談社	2019	3階	491.8 MIY	01361299
日本で治療薬が買えなくなる日	五味洋治	宝島社	2022	3階	499.09 GOM	01383036
「食」の未来で何が起きているのか：「フードテック」のすごい世界	石川伸一	青春出版社	2021	3階	588 ISI	01375320
“食の安全”はどこまで信用できるのか：現場から見た品質管理の真実	河岸宏和	アスキー	2008	3階	588.09 KAW	01140762
「やりがい搾取」の農業論	野口憲一	新潮社	2022	3階	612.1 NOG	01380297

第20回「京都産業大学図書館書評大賞」で応募があった図書一覧

所蔵場所・請求記号順
2025年5月時点

書名	著者	出版社	出版年	配置場所	請求記号	資料ID
君たちはどう生きるか	吉野源三郎	岩波書店	1982	3階 法学部の 学び	159.5 YOS	20211423
うさぎのヤスヒコ、憲法と出会う：サル山共和国が守るみんなの権利	西原博史	太郎次郎社エディタス	2014	3階 法学部の 学び	323.14 NIS	01389224
18歳から考えるワークルール	道幸哲也	法律文化社	2024	3階 法学部の 学び	366.14 DOU	01399651
動物農場	ジョージ・オーウェル	角川書店	1991	3階 法学部の 学び	933.7 ORW	20081040
モンテッソーリ教育思想の形成過程：「知的生命」の援助をめぐって	早田由美子	勁草書房	2003	地下1階	371.237 HAY	01009754
2010年宇宙の旅	アーサー・C・クラーク	早川書房	1984	地下1階	933 CLA	00382487
モモ：時間どろぼうと、ぬすまれた時間を人間にとりかえてくれた女の子のふしぎな物語	ミヒャエル・エンデ	岩波書店	1976	地下1階	943 END	00780371
土台穴	アンドレイ・プラトノフ	国書刊行会	1997	地下1階	983 PLA	01378054
下剋上受験―両親は中卒それでも娘は最難関中学を目指した！	桜井信一	産経新聞出版	2014	―	<376.8>	(所蔵なし)
休養学―「休み方」を20年間考え続けた専門家がついに編み出したあなたを疲れから救う	片野秀樹	東洋経済新報社	2024	―	<498.35>	(所蔵なし)
本当の自由を手に入れるお金のある大学	両@リハ大学長	朝日新聞出版	2024	―	<591>	(所蔵なし)
ドイツ人はなぜ、年収アップと環境対策を両立できるのか	熊谷徹	青春出版社	2023	―	<519.1>	(所蔵なし)
強者の流儀	朝倉未来	KADOKAWA	2022	―	<789>	(所蔵なし)
現代文の学び方	高田瑞穂	筑摩書房	2025	―	<817.5>	(所蔵なし)
番号をどうぞ	星新一	理論社	2002	―	<913.6>	(所蔵なし)
これは経費で落ちません！	青木祐子	集英社	2016	―	<913.6>	(所蔵なし)
ノッキンオン・ロックドドア	青崎有吾	徳間書店	2019	―	<913.6>	(所蔵なし)
笑うマトリョーシカ	早見和真	文藝春秋	2024	―	<913.6>	(所蔵なし)
クスノキの女神	東野圭吾	実業之日本社	2024	―	<913.6>	(所蔵なし)
月光	誉田哲也	中央公論新社	2013	―	<913.6>	(所蔵なし)
Unnamed Memory	古宮九時	KADOKAWA	2019	―	<913.6>	(所蔵なし)
時給三〇〇円の死神	藤まる	双葉社	2017	―	<913.6>	(所蔵なし)
フォルトゥナの瞳	百田尚樹	新潮社	2015	―	<913.6>	(所蔵なし)
二木先生	夏木志朋	ポプラ社	2022	―	<913.6>	(所蔵なし)
りぼぐら！	西尾維新	講談社	2022	―	<913.6>	(所蔵なし)
征途	佐藤大輔	中央公論新社	2017	―	<913.6>	(所蔵なし)
花散るまゑに	佐藤零	集英社	2023	―	<913.6>	(所蔵なし)
怪物	佐野晶	宝島社	2023	―	<913.6>	(所蔵なし)
小説君の名は。	新海誠	KADOKAWA	2016	―	<913.6>	(所蔵なし)
望み	栗井脩介	KADOKAWA	2019	―	<913.6>	(所蔵なし)
バレエ・メカニク	津原泰水	早川書房	2009	―	<913.6>	(所蔵なし)
方舟	夕木春央	講談社	2022	―	<913.6>	(所蔵なし)
孤独の価値	森博嗣	幻冬舎	2014	―	<914.6>	(所蔵なし)

第20回 京都産業大学図書館書評大賞 概要

目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

応募要領(抜粋)

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生

2. 応募要件

- (1) 対象とする図書の所蔵は問わない。ただし、マンガ・雑誌・写真集は除く。
- (2) 使用する言語は、日本語とする。
- (3) 文字数:1篇につき 800 字以上1,200字以内。
原稿は、所定の応募原稿様式*を使用して作成すること。
*応募原稿様式(本学所定のマイクロソフト社 Word ファイル)は、図書館 Web サイト(<https://www.kyoto-su.ac.jp/library/>)から入手すること。
- (4) 応募作品は本人のオリジナルであり、かつ未発表であること。
(解説等 公開済文章の盗用や ChatGPT 等 AI を使った文章の作成をしないようにしてください)
- (5) その他:1人複数篇の応募可。ただし入賞は1人1篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

応募実数

110篇

実施日程

応募期間:2025年5月19日(月) ~ 7月17日(木)

入選発表:2025年 11月26日(水)

表彰式:2025年12月24日(水)

